校 長 室 だ よ り（No.6）

令和４年５月27日
丹波市立黒井小学校長
谷口　千尋

専科指導と少人数指導

教科担任制（専科指導）については、従前からよく行われてきた音楽科や家庭科にあわせるかたちで、兵庫型教科担任制として、理科や社会科、体育科などの教科担任制が行われてきました。これは、特に小学校高学年において、中学校の教科担任制へスムーズな移行することや、生徒指導面において、より多くの教員のかかわりがあったほうがよいという考え方に基づいています。また、児童の個性に応じた得意分野を伸ばしていくこともでき、教員の専門的な知識や得意とする分野科等を活かすことも可能です。特に、小学校における外国語については、中学年から「聞く」「話す」を中心とした外国語の活動を、高学年から段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えた領域を扱う教科になっています。この状況に対応するために、専科指導を行う教員の養成や確保、中学校教員の活用など、専門性を一層重視した指導体制をつくっていく必要があります。黒井小学校でも、４年生以上で理科は専科指導の体制をとっています。また、外国語についても専科指導にあわせて、外国語指導助手に来校いただいています。４・５・６年生では、受け持つ教科を担任で授業交換し、お互いの学年・学級を教えています。つまり、高学年では、担任を含めて約７名の教員が授業にかかわっていることになります。

少人数による指導については、教室の児童を半分にわけて行う少人数での授業や発達段階によっては、複数の教員がチームを組んで、同じ教室で指導する同室複数指導等を行っています。特に、小学校段階では、発達段階に応じてそれぞれ異なる課題を大切にする必要があります。１・２年生においては、２年間での学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響しているとの課題が指摘されていることがあります。基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させておくことが大切です。３・４年生においては、学習内容（特に算数科）が次第に抽象的な内容に近づいていく段階であり、そうした内容を扱う学習にスムーズに移行できるような指導上の様々な配慮が課題です。具体から抽象への移行がおおきな山です。５・６年生においては、児童の抽象的な思考力が大きく高まる時期であり教科等の学習内容の理解をより深め、育成すべき資質・能力の育成に確実につなげるためにも指導の専門性が求められます。児童の興味や関心、得意、不得意に応じていくことは、簡単ではないと考えます。毎年変わる子どもたちと教える側の教員、制度を活用しながら様々な方法のベストミックスを実現できるように推進することが必要です。